

学苑 第八九三号 一一〇二七 (二〇一五・三)

『蠟人形』の検討 VI

猪熊雄治

I

前稿でも述べたように、大島博光が編集を担当した昭和十五年五月号以降の『蠟人形』の誌面には、批評の充実や海外詩記事の拡充等の大島の求めた方向が、新しい寄稿者を中心に展開されていた。一方で戦時色の深まりとともに、十六年後半の『蠟人形』には、長田恒雄「文化翼賛としての詩人団体とその動き」(七月号)を始めとして、浅見勝治「詩人と翼賛」

(九月号)、長田「詩人と翼賛」(十月号)、山本和夫「戦場と詩人」、蔵原伸二郎「民族的優越感」(十一月号)と時局を踏まえた批評が相次いで掲載されるように、誌面にも時局性が一段と現れる時期を迎えていた。これらの批評には、当時の詩壇状況を強く反映させた論調も見られ、例えば浅見勝治「詩人と翼賛」では、詩人の「真の職域奉公の意義」として「…吾々は国家の終局の目的性の為には、片々たる小我や偏見を捨て、率先して全体的組織のもとに統合されねばならぬ…」と詩人の翼賛意識が強く求められている。また、蔵原伸二郎「民族的優越感」でも「…正しい民族的優越感の上にすべての文化的創造は行はれねばならない…」日本人の優越感是我々が何よりもまづ皇国の臣民道に徹することから以外には絶対に出発点

はありえない…」等の民族意識が濃厚に打ち出されるが、このような翼賛意識や民族性を強く表出させた批評の掲載からも、同時代の詩傾向が『蠟人形』に浸透していく様子がうかがえる。十五年五月号以降、大島も「詩人たちはペンをもつてたかひ民族の歌声をたからかに歌はねばならぬ。」(編輯後記 十五年八月号)のように翼賛や民族を意識した発言を重ねてきたが、時局や翼賛を意識した誌面の増加によって、『蠟人形』の戦時色もより明確になったといえる。

このような同時代の傾向を批評する視点も、この時期の『蠟人形』には提出されていた。大島自身、翼賛姿勢を表明しつつ、自己が求める詩の方向も繰り返し語り、例えば十五年九月号の「編輯後記」に見られた「われわれの民族はいま未曾有の試練のまへに立つてゐる。すべての力が、あらゆる力がそこに集中されなければならぬ。…詩人たちの負託と奉仕は単に勝利への鼓手としてとどまることにあるだけではなく、…詩芸術を新しき伝統として確立するところにある。」のように翼賛意識と繋げて、詩人や詩のあるべき姿を描いていた。同様の姿勢は十六年後半の号にも見られ、「詩人の祖国への奉仕はただ世界大の詩作品を書くことにかゝつてゐる。」(編輯者の手帳 十六年七月号)や、「われわれはこの異常な時代への意識を

強力な闘ひにまで高めなければならぬ。…詩は民族の感情を昂揚もするが、またその知性をまもり、その知性を訓練するものでなければならぬ。」（『編輯後記』十六年九月号）といった発言が重ねられる。大島は『『日本の』をめぐって』（十四年三月号）では、「ポエジイ」が創造する「あらゆる人間精神と人間意識に深く共同であるやうな世界的な芸術」に詩の価値基準を設定し、民族主義的な詩観への批判を語っていたが、この時期掲載された「俳句と詩と」（十六年九月号）でも、「…人間意識の共同性こそあらゆる芸術が成立する隠された第一条件である。」とし、詩の本質を人間意識に内在する普遍性に求めている。「『編輯後記』等で語られる詩の方向には、このような大島の詩観が背景としてあり、「勝利への鼓手」や「昂揚」の語が暗示するような同時代の詩傾向への批評となつたのであろう。

自己の芸術観を通して同時代の詩を批評する試みは、この時期の『蠟人形』では奈切哲夫からもなされていた。大島が編集を担当して以降、奈切は『蠟人形』に重ねて批評を発表していくが、普遍的な人間性に芸術評価の基準を求める姿勢には、大島との共通性が見られ、自己の評価軸による詩壇状況への鋭角的な批評を誌面で展開してきた。詩の翼賛傾向についても「詩壇時評」（十六年八月号）では、「…詩人が文化の一面から翼賛の一端を分担せんとする意図は極めて意義することに違ひない。」としつつ、翼賛団体に所属する詩人の「詩の根ざしてゐる土壤が次第に多元的な性格から一元的な性格に移行」する傾向を指摘し、「余りに主張面にのみに捉はれ過ぎ、芸術本来の本質を閑却してゐる」事態への危惧が語られる。奈切は「…偉大なる芸術は…多元的な思索的土壤の中に胚胎しなければならぬ。」との持論から、翼賛傾向を批評し、「詩に於ける翼賛があくまでも芸術としての面からの翼賛である以上、どこまでもより偉大な芸術へのグ

ラフ線上に深く根を下してゐる芸術からの翼賛でなければならない。」との見解を導くのだが、大島が「世界大の詩作品」に詩の方向を求めたのと同様に、「偉大なる芸術」との対比によって翼賛詩の現状が眺められている。

さらに十六年後半の号でいえば、大島や奈切に近い視点を提示した論として、十月号掲載の長田恒雄「詩人と翼賛」もあげられる。寄稿で求められた「如何に翼賛してゐるか」「如何に翼賛しなければならぬか」の回答として、長田は「…何等詩作の実践もなしに、ただ声のみを大にして時局の波にとびのらうとすることも、翼賛のみちではない。」「もとより本質的な詩人としての価値は、いかによき詩を書くかによつて定まるのである。

つまり、詩人として翼賛する真実の資格はそこにある。」と作品の内容や創作力に焦点をあてた方向を強調する。「よき詩」の概念については言及されないものの、「詩に専心することが何よりも詩人の本道」との観点から「芸術としての面」からの翼賛詩を求めた点で、長田の姿勢は大島や奈切の問題意識と重なり合う。同号「『編輯後記』では「周到な時局意識を以つて、詩人の翼賛を論じたもの」と語られ「御愛読を乞ふ」との一節が付け加されるのも長田の姿勢への評価であらう。このように十六年後半の号には、同時代の詩状況を強く反映させた批評とともに、同時代詩への批評性を含ませた詩論も、あわせて掲載されている。批評の充実を図ってきた方向は、同時代の詩についての複眼的な視点を誌面にもたらしただけではないか。

II

十六年十二月の日米開戦は早速誌面に反映され、十七年一月号の巻頭に

は西條八十の詩「戦勝のラジオの前で」が、また巻頭近くに緒戦の勝利を踏まえた蔵原伸二郎の「文化宣戦」が掲載されている。「文化宣戦」は「民族的優越感」同様、民族主義に深く傾斜する自己の位置から詩人の姿勢を求めたエッセイで、「芸術は民族国家と共に愈々その光輝を発する永遠の消耗せざる武器である。」や「われら今こそ欧米的精神に宣戦し、これを徹底的に撃滅しなければならない。」のように、開戦によって喚起されたナショナリズムが全面的に打ち出された「主情に徹した極端な攘夷論」(笹澤美明)⁽²⁾の作品となっている。蔵原論に現れた風潮が意識されたのか、大島による同号の「編輯後記」にも民族意識は強く映し出され、「昭和十六年十二月八日——ここにわれわれがこころ深く深く銘記すべき偉大な日附がある。」の書き出しから始まるこの文では、「偉大なる戦ひの日は来た。」「…驚異すべき勝利を挙げてゐる」との開戦の感激が感情的な筆致で綴られ、「今こそ、詩人たちが象牙の塔より降り立ちて、祖国に奉仕するときに来たのである。」と詩人の責務が強調される。『蠟人形』への開戦の影響は、このような翼賛姿勢の強調として現れ、十七年の『蠟人形』は翼賛性を強める形で刊行されていた。

強化された翼賛姿勢の現れとしては、まず蠟人形社が主催し、大政翼賛会の後援を受けた「愛国詩の夕べ」の開催があげられる。十七年二月号の「編輯後記」や同号での予告によれば、二月十四日に日本青年館で開催されるこの催しには、西條や尾崎喜八、蔵原、佐藤一英、大島等による詩朗読の他、講演、舞踊、独唱の演目が計画され、開会趣旨として「皇軍将士への感謝を表現し、併せて銃後の精神昂揚に資すると共に、詩芸術の隆盛を期する」ことが掲げられていた。その後二月二十八日に変更されたものの、予定通り開催され「…多数の—殆ど意外とも云ふべき—参会者を得た

事は、誠に意味深く且つ喜ばしき現象であつた。」(「編輯後記」十七年四月号)との回想が語られている。誌面上に見られた翼賛姿勢の拡大としては、まず愛国詩隆盛の動きを踏まえた二月号からの「愛国詩」投稿欄の設置が指摘できる。十三年三月号から設置されてきた「戦時歌謡」投稿欄に代わって登場した二月号「愛国詩」欄には早速十一編の詩が掲載され、同号推薦欄にも戦闘機の雄姿を描いた「炎の舞」と題した投稿詩が載せられている。さらに十七年三月号は「愛国詩特輯」として編まれ、巻頭に佐藤惣之助「一機還らず」、大江満雄「友人よ」、後藤郁子「天の戸」、安藤一郎「国土の空」、笹澤美明「銀の栄冠」の五編が掲載されている。詩論でも翼賛色を色濃く打ち出した批評が掲載され、三月号の西尾洋「大東亜戦争と愛国詩」では、「現下の戦争に勝つための緊急なる愛国詩」と「時の戦ひにも耐へうるがとき永遠の愛国詩の創造」の必要性が訴えられ、そのための詩の音楽性や「英雄的精神」の覚醒が求められている。西尾は戦争が詩に与えた「偉大なる教訓」に「英雄的精神の存在」をあげるが、四月号の深尾須磨子「愛国詩をめぐって」でも「遠征皇軍将兵の、勇美を兼ね備へた高潔な意気と行動」に「日本の詩精神の現実的高揚の極致」を重ね、「詩は飽くまでも歌ふべきものである」ことが主張されている。詩の朗読が盛んとなった開戦後の動向に呼応する形で、両論とも詩の翼賛方向を探ろうとしたのであろう。

しかしこの時期掲載された詩論には、翼賛姿勢を全面的に提唱するのではなく、愛国詩や翼賛詩の問題点を指摘する姿勢も現れていた。例えば二月号掲載の長田恒雄「詩人の決意について」では、国威発揚等のために要請されている詩の「効用的な面」と、「純粋な詩の実験」を対比させ、「詩報国に専念」するための「純粋な詩精神の活動を志し、安易な妥協を

排」する必要性が力説される。長田はほぼ同時期に発表した「現代詩と⁽³⁾して」でも「…愛国詩を書くにしても、何よりも先づそれが詩でなければならぬ」。「…如何に愛国的であつても、それが詩としての高さを持ち詩としての世界を持つてゐるものでなければならぬ」と作品価値を優先させているが、「詩人と翼賛」に見られた姿勢は開戦後の詩壇傾向に対しても継続して示されていた。さらに長田が求めた芸術性を、表現の問題から追求した論として、三月号には岡本潤「時代の韻律―詩壇時評―」が載っている。この論で岡本は、神保光太郎の「国民詩の進撃」⁽⁴⁾の一部を引用しながら、神保のように開戦時の「国民的感激」が「即応的に詩に翼をあたへるものになつてゐる」ことへの疑問を起点に、「烈しい内部的相剋」が認められない愛国詩の「うはずつた調子や粗硬な叫喚」や漢文調や文語調の詩の「懐古性」や「停滞性」を指摘する。岡本によれば「詩人の言葉が十分に鍊り鍛へられたもの」になるためには「詩人自身の苛烈な自己否定」が必要であり、この詩観からの同時代の愛国詩への厳しい批評が語られている。このように翼賛の姿勢が表明される一方で、芸術性の観点から同時代詩の傾向を眺める論の掲載からは、開戦前からの誌面傾向の継続も見ることができる。翼賛姿勢を強化しながら活発な批評を目指す姿勢は戦後の誌面にも維持されている。

III

以前の誌面傾向が開戦後も引き継がれたものの、この時期の『蠟人形』は頁数の減少問題にも直面していた。大島が編集を担当して以降、十六年十月号まで維持された百四頁の体裁は、十一月号で九十六頁、十二月号からは八十頁、十七年二月号から七十二頁と徐々に崩れ、十七年五月号以降

十八年四月号までの一年間は五十五―六頁で刊行される。このように頁数が一年間で半分近くにまで縮小されていくにもかかわらず、大島が志向してきた批評の充実、頁数が一段と減少した十七年五月号以降でも試みられ、例えば五月号には堀安夫「散文から詩歌へ」が掲載されるように、新たな寄稿者による詩論面の活性化も図られている。「―ポエジーの在り方について―大江滿雄氏におくる」との傍題を持つ「散文から詩歌へ」は、言語哲学的な視線から詩の根本的な性質を追求した本格的な詩論で、散文と詩歌の言語を比較し、「言語が事実との最短距離に置かれてゐる」散文に対して、「…事実のところへは到達しない」詩歌言語の特質が指摘される。

「詩の肉体についての豊饒な一つの批評評論」⁽⁵⁾を待望していた大島は、編集担当以後奈切や高橋玄一郎、伊藤信吉等の新たな詩論の書き手を登場させてきたが、堀の起用にも大島の期待が働いていたのではないか。さらに前述の堀論で考察された詩語の問題は、他の執筆者からも論じられるテーマとしても浮上し、堀の詩論を契機に詩語や詩の本質性を論じる詩論の展開が生まれている。

その一つが六月号掲載の大島「詩についてのノート(1)」であり、堀と同様に詩と散文の質的差異が問題視される。大島は以後「詩についてのノート(2)」(八月号)、「詩についてのノート(3)」(十月号)と書き継ぎ、作品構成を重視する主知的な姿勢を詩人に求めていくが、この連載は、編集担当以降、「編輯後記」等で断片的に語ってきた自己の詩観を概括した論となっている。堀も八月号に「佐藤一英著『空海頌』について」を、九月号には「散文から詩歌へ」の続編「詩歌の言葉から神の言葉へ―ポエジーの在り方について(承前)―」を発表し、詩歌の芸術性を再論していくが、この九月号には、「散文から詩歌へ」に応え「―堀安夫氏におくる(そ

の「一」と傍題された大江満雄の「詩語と現代国語の問題」も載り、詩語と日常言語の関係が論じられている。さらに十一月号「特輯『詩人と国語問題』」の企画も、このような堀論を起点にした詩語考察の広がりから導かれたのではないか。この特集では岡本潤「現代日本語——詩人の感想——」、近藤東「詩人と国語問題」、安藤一郎「詩人より見たる国語問題」、横山青娥「迎合主義を排す」、奈切「国語問題談義」の五編が各々の視点から詩語の問題を語り、詩語を対象とした論がまとまった形で提出され、詩論の充実を求めてきた『蠟人形』の姿勢を現した誌面となっている。同号「編輯後記」には、「……詩人はおのおのの詩作を通して、絶えず国語問題の根源的な面に直面し、言葉について思索し、国語を美しくすることに絶えず配慮してゐなければならぬ。」の一節が記されているが、開戦後の詩面でも詩の芸術性を重視していた大島は、五十六頁となった五月号以降、詩や詩語の「根源的な面」を探る方向に焦点を絞り、批評の活性化を模索したと思われる。

十八年の号でも頁数減少はさらに進み、五月号以降は四十八頁に、九月・十月合併号では四十頁に、その後は最終号となる十九年二月・三月合併号では三十九頁になるものの、十八年十一月号から十九年一月号までは三十二頁にまで激減する。このような困難な状況の中でも、堀「対話の言葉——ポエジーとモラルの問題——」（十八年一月号）を始めとして、伊藤信吉「現代詩の古典性（一）（四）」（二月、四月、七月、九月・十月合併号）、奈切「悟性の開花——美の秩序・序説——」（三月号）、大江「間接表現と直接表現——主として西行と実朝にふれ、堀安夫氏におくる」（五月号）、内山義郎「詩と生活」（八月号）、瀧口修造「声と言葉」（同号）、堀「詩歌の運命——ポエジーとモラルの問題——」（十九年一月号）等の詩の芸術性を解析する批評の掲載が続いてい

る。緊迫化する戦時状況を受けて、「銃後の士気を沮喪し、その戦意を鈍らせるやうな詩は抹殺すべきである。」と主張する大島庸夫「決戦下の詩人と詩——詩もまた武器である——」（十八年十一月号）のような時代風潮がそのまま表出された論も誌面には登場するものの、十八年以降の詩論掲載にも、芸術価値を重視する大島の姿勢が反映され、批評の充実を求める方向が終刊の頃までも模索されていたのであろう。

IV

批評とともに、海外詩の紹介や翻訳に力を注ぐ方向も、開戦後の誌面には継続されている。例えば十五、十六年の号に多く見られたリルケへの着目は、十七年一月号から始まる関口政男訳の「オルフォエスに捧げる十四行詩——ウエラ・オウカマ・クノープの墓碑銘として——」「オルフォエスへの十四行詩（第二部）」が、十八年十二月号まで断続的に計十二回掲載されるように十七年以降も引き継がれ、終刊までには堀口大學の訳詩の他、批評等では石中象治「リルケの愛について」（十七年一月号）、堀口訳「リルケの墓を訪ねて——アリエット・オドラ」（十八年二月号）が掲載されている。リルケ以外のドイツ詩については、笹澤訳「ナチス詩抄」（十七年九月号）や石中によるゲオルグの訳詩の他、ドイツ詩紹介の石中「ドイツに於ける『春』の詩と詩人」（十八年四月号）やドイツ詩を民族主義的な観点から概括した高橋義孝「ドイツの愛国詩について」（十七年四月号）、「文化形成者としての詩人——ドイツ詩人について——」（十七年十月号）もあり、ドイツ詩関連の記事は誌面に多く登場していた。フランス詩も、新城和一のヴァレリー訳や堀口、青柳瑞穂によるノワイユ夫人の訳詩の他に、批評の翻訳として中桐雅夫訳「ヴァレリイ論（一）（二）」セオドラ・ボザンケ」（十七年

一月～二月号)、大島訳「詩人と神秘家(1)～(3) ロオラン・ド・ルネヴィル」(十八年三月～五月号)、「詩と神話(1)～(4) ロオラン・ド・ルネヴィル」(十八年六月～九月・十月合併号)があり、さらに『蠟人形』への初寄稿となる堀田善衛の批評「ラムボオに就いて『酩酊の朝』をめぐって」(十七年九月～十月号)も掲載されるように、十七年以降もフランス詩への視線は誌面に現れていた。その他の海外詩記事としては、奈切訳「エドガア・ポオ研究(1)～(5)―伝記的背景―アーサー・ランソン」(十六年十一月～十七年五月号)や日夏耿之介によるポーの訳詩等があり、十五年から十六年の号で海外詩の記事を拡充した大島の姿勢も、減頁後は規模を縮小しながら誌面に働いていたと思われる。

さらに大島が編集を担当して以降、進めてきた新しい寄稿者の起用も、堀や堀田の登場に見られたように、十七年以降の誌面でも続けられている。十七年の号からの主な初寄稿者を見れば、井手則雄(十七年二月号)、小島禄琅、壺田花子(十七年五月号)、中山省三郎(十七年八月号)、宮川寅雄(十七年九月号)、中野鈴子(十八年一月号)、高祖保(十八年六月号)と、中堅詩人や詩以外の芸術家を含む幅広い起用が見られ、刊行が困難化していく時期であっても、詩誌としての質の高さを求める大島の意欲がうかがえる。一方新進詩人からの新寄稿者としては、『蠟人形』への投稿活動が評価され、十五年前後に準同人に推薦された投稿者たちが想定されていた。例えば十六年の号では一月号の社告で西田春作、川上高、深町敏雄の準同人昇格が記され、それぞれ寄稿者欄に詩を発表していくが、川上、深町が翌年以降の号には寄稿が見られないものの、西田はその後も十八年五月号まで寄稿を続けるように、『蠟人形』を支える執筆者となっていく。同様の例は十六年六月号から寄稿欄に昇格し、終刊号まで寄稿を重ねる楊明文

にも見られ、十五年の号からはほぼ終刊頃まで寄稿し続けた「星林」出身の松本隆晴、石井健次郎、龍野咲人等に続く有力な執筆者の出現となっている。さらに西田等より一、二年早く昇格し、その後掲載を重ねた者としては、八篠冷子、村田和歌子、瀬川忠司、末竹余四春、三谷木の実等があげられ、大島は自己が編集を担当し始めた前後に投稿実績を認められた投稿者に、以後の有力な書き手への成長を期待し、西田たちもその期待に応え、大島が編集する『蠟人形』を支える執筆メンバーになっていったのである。

十五年五月号以降の大島が編集を担当していく『蠟人形』は、時代風潮との対応や頁数削減等の困難に直面しながら十九年二月・三月合併号での終刊まで約四年間刊行されている。しかし誌面を見れば、時代からの強い圧迫を受けながらも自己の芸術観に基づく大島の編集姿勢は一貫され、戦時下であっても芸術性の高い誌面が実現していた。編集開始時に志向された詩批評の活性化や海外詩の積極的な紹介、さらには優秀な詩人の発掘等のテーマも一応の達成を見せ、さらに頁数が激減しつつも終刊時まで続けられていたと思われる。

注(1) 『蠟人形』の検討 V 「学苑」平成二十六年三月号

(2) 笹澤美明「詩壇時評」『文芸汎論』昭和十七年三月号

(3) 長田恒雄「現代詩として」『文芸汎論』昭和十七年四月号

(4) 神保光太郎「国民詩の進撃」『文芸』昭和十七年二月号

(5) 大島博光「詩壇時評」『文芸汎論』昭和十五年二月号

資料調査では、日本近代文学館、神奈川近代文学館、本学図書館近代文庫のお

世話を頂いた。また『現代詩1920―1944―モダニズム詩誌作品要覧―』（和田博文監修
二〇〇六年十月 日外アソシエーツ）並びに『現代詩誌総覧⑤―都市モダニズムの光と
影Ⅰ』（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年一月 同右）、『現代詩誌総覧⑥―都
市モダニズムの光と影Ⅱ』（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年七月 同右）、『現
代詩誌総覧⑦―十五年戦争下の詩学』（現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年十二月
同右）、『西條八十全集 別巻 著作目録・年譜』（西條八十全集編集委員 二〇一四
年七月 国書刊行会）を活用させて頂いた。併せて御礼申し上げます。

（いのくま ゆうじ 日本語日本文学科）